

・ 都市産業集積論レポート

一 産業集積研究の大まかな流れと論点の変化

M13UB552 M-1 守島 正

産業集積とは、産業が集積することにより、何らかのメリットを企業が享受できるから興りうるゆえ、産業集積研究の大まかな流れと論点の変化について、そうした集積による何らかのメリットとともに考えて行きたい。

<伝統的集積研究>

まず初期研究においては、A・ウェーバー『工業立地論』（1909）において、費用と収入という二つのファクターに基づく立地の法則の中で費用の節約の重要性を説き、立地因子の一つに集積因子をあげ、集積自体は、費用因子にならないが、実際には集積により費用が下がるとあるとしたように、A・マーシャルによると、同一産業において、企業が特定の地域に集積することで、技能者の労働市場が形成され、周辺産業が成立し、取引や情報の伝達が円滑になるとあるように、その産業において企業外部の生産規模が上がってくることで、企業自体の費用も逡減していく、つまり外部経済のメリットを求められることができるとされ、こうした外部経済が発生することにより産業自体の規模の経済性等が得られるという論点や、外部性の存在により大手企業内部に統合された大量生産による規模の内部経済とは異なる論理が生まれ、分業が成り立ち、分業された専門企業、専門家が地域に共有され、地域ネットワークを通じてイノベーションが生じさせるという論点が、産業集積のメリットとされた。

<ポスト・フォーディズム>

しかし、フォーディズムの隆盛以降、生産の拡大により規模の経済を成立させる環境から、供給の過剰・需要の多様化・リスクや不確実性の増大という環境変化の中、大量生産・大量消費モデルは弊害を生む状況も作り出し、従来型の集積利益に限界が見られるようになった。

こうした中、ピオリ&セーブル『第二の産業分水嶺』（1984）によると、「柔軟な専門化」体制がものづくりの柔軟性と永続的なイノベーションを可能にするとして、それぞれの地域がそれぞれのやり方で市場の変化や多様化に柔軟に対応した生産を実現したこと、具体的には、クラフト的伝統技術とNC工作機といった柔軟な小ロット対応可能な生産設備との結合のように、企業は特定の工程に専門化し、分業上の水平的ネットワークを構築することで変化の激しい市場に対応させる生産体制への移行を取り上げた。

19世紀のフォーディズム的な画一的な大量生産が、これまでのクラフト的生産体制を淘汰したことを「第一の分水嶺」とすると、それに匹敵するものとして、こうした柔軟な専門家による多様なニーズへ対応する生産体制を「第二の分水嶺」と名付け、その例として、「第三のイタリア」などをあげ、新しい社会経済も出るとして、ポストフォーディズムへの移行の中で注目されるようになる。

また、こうした柔軟性といった論点は、アラン・スコット「新産業空間論」(1988)に引き継がれ、ここでは産業集積の意義として、リンケージ費用(輸送費+取引費用)が削減できることをあげているが、これは産業集積における地域労働市場の柔軟性が生産システムの柔軟性を高める点や、垂直分割された業務・工程が集積することで、市場メカニズムが円滑になることを明らかにしており、柔軟性により担保される分業の深化や垂直分割が企業間の取引費用の節約に繋がることとした。(長山 宗広「地域産業活性化に関する諸理論の整理と再構築 ～地域における新産業創出のメカニズム～」2005)

こうした取引費用論を援用し、産業組織と産業集積の形成を関連付けて、かつ柔軟性の効用を論じたが、その例として、スコットは「メトロポリス」(1988)において、シリコンバレーをあげ、分業が深化することによって産業集積が生まれ、集積することによってさらにその地域が優位性を増すことを観察し、産業集積を都市の原基形態(protourban forms)と位置付けた(富沢木実 『産業集積に欠けている十分条件』2002)。

<近年の研究>

伝統的集積研究から企業の費用節約という論点を主に集積論が展開されてきたが、フォーディズム終焉以降、近年では、創造産業の振興に加え、グローバル化、輸送力の拡大等により、立地による費用の比較優位性の論点は薄れ、その論点は主として、地域の独自性や集積内での競争・協力の伴う生産性向上やイノベーションの誘発へと移行されるようになる。

M・E・ポーターのダイヤモンドモデルでは、産業クラスターにより、域内において各主体が強調しつつ競争することによって、シナジー効果を生じさせていることを説明しており、集積のメリットとして①生産性の向上 ②イノベーションの促進 ③新規事業の創出があげられる。原田誠司「ポーター・クラスター論について」2009)。

また、ポーターは産業クラスターの形成を促す要因として、地域独自の資源や独自ニーズをあげたが、宗教・文化・慣行・人々の気質といった、(原田誠司「ポーター・クラスター論について」2009)よりローカルな独自性に注目が集まるようになり、「革新的な企業はローカルな環境から生み出されるものであって、それより先に存在するものでない・・・」(Aydalot 1986)とエイダロが言うように、環境によるイノベーションへの影響や、地域の顕在化していない暗黙知レベルの資源まで、産業クラスターの形成～成功要因と考えられる。

現在では、こうした地域性や地理的なものにかぎらず、イノベーションをアクター間の相互作用から生まれるものとする(立見淳也 2014.01.23)としたうえで、認知的近接性、文化などの制度的な近接性、組織的近接性など、集積による知識の交差から発生するイノベーションを様々な観点で捉え、その研究がなされている。

～参考～

富沢木実 『産業集積に欠けている十分条件』 2002

長山 宗広 『地域産業活性化に関する諸理論の整理と再構築』 2005

原田誠司 『ポーター・クラスター論について』 2009